

世かけて
思ひました

「戦後70周年記念・ 日中友好訪中団」に参加して

渡邊澄子（会員）

昨年8月、協会の「戦後70周年日中友好訪中団」に参加させていただき、中国東北部（旧満洲）へ行った。中国は、北京外

語大学と北京日本学研究中心とそれぞれ約1年間の客員教授として赴任、終了後の各地旅行（チベットまで）や、講演などで計2年半余過ごした馴染み深い国だが、未知の旧満洲は文学者の戦争責任問題に関わる地なので、好機とばかり割り込ませていただいた。協会と同行の皆さまに感謝します。

参加の真意は、安倍政権の侵略の歴史認識に対する無知・無恥への怒りに発した、文学者の戦争責任問題の検証にあった。だが検証は烏有に帰した。彼らの多くが泊まったヤマトホテルには宿泊者名簿ほか当時を知ることのできる資料は総て文化大革命で棄・焼却されてしまって

いたのだ。無念さは、ここで飲めた本物のコーヒーが氣息奄々の早天で水を得たことでほんの少し救われた。

戦時下、この地で筆舌に尽くせぬ苦難をなめた日本人の労苦を偲び、さらに犠牲とされた多くの現地民衆の方々の霊への祈りを捧げて不戦を誓うのが私にとっての大事な目的だったが紙幅の都合上、順不同に強烈な印象を受けたことのみ簡単に述べておきたい。まず、啞然、驚愕、感動したのはハイラルに向かつての内蒙古の草原だった。世界四大自然草原の一つらしいが、行けども行けども果てしなく続く緑一色の草原の壮大さに圧倒された。やっと牧羊・牧羊の群れや風力発電の柱が見られたがまたまた続く草原。あの広大さはテレビなどによる認識が如何に薄っぺらなものだった

か、まさに百聞は一見に如かずである。激戦の末、敗北に終わったノモンハン事件を偲ぶ「ノモンハン戦役遺址陳列館」は辛かった。今回の旅行中、私を震えあがらせたのは七三一部隊だったが、「罪障陳列館」は新装工事中で入館できず、何とも残念で、完成後ぜひ行かねばと思っている。帰国後、未読だった『悪魔の飽食』はじめ、幾冊かを買って読み、恐怖に駆られ、戦争が人間を悪魔に変える構造を改めて考えていた時、友人から「『ABC』問題は解決できるのか」（松村高夫）という冊子を送られた。「まえがき」には集団的自衛権の行使容認の閣議決定で、戦前の日本を思わせる状況を現前にして「歴史事実を直視する視座」持続の重要性が述べられているが、私は同感である。

ところで日本文学研究者の私にとってこれらの書から得た知識は絶大だった。A（原爆兵器、延長線上の原発）、B（七三一部隊に象徴される生物兵器・細菌兵器）、C（日本が開発した不凍性イペリットや青酸ガス兵器）の残酷性を詳しく知って震えた。ABC兵器は人間の尊厳を抹殺したもので、あってはならないものだ。七三一部隊は生物・細菌兵器開発のために中国人を最多に3千人以上を「マルタ」（丸太）として残酷無比な生体実験に使い、証言者皆無の全員虐殺をしているが、石井隊長ほか彼らは実験資料のアメリカへの提供で戦犯を免責されている。実験の当事者高橋正彦・金子順一両医師は戦後、実験報告論文で慶大・東大で博士号を授与されている。何と云うことだろう。この部隊を支えた「五一六部隊」（チチハル）跡にも行ってみたかった。漱石は科学（化学）の進歩の危険性を預言している。人間が容易に悪魔と化す戦争の構造を知るためにアウシュビッツに行ってください。